

## 別記様式第6

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	何 美娜
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 正岡子規漢詩研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	佐藤	利行
審査委員	教授	河西	英通
審査委員	教授	妹尾	好信
審査委員	岡山大学文学部 教授	橘	英範
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、正岡子規（1867～1902）の漢詩を取り上げ、その分析によって子規文学の全体像の解明を試みたものである。論文は、第一章「序論」、第二章「中国古典との関連」、第三章「子規漢詩の特色」、第四章「研究のまとめ及び今後の課題」から構成されている。</p> <p>第一章では、子規の生い立ちと子規が漢詩に親しむ生活環境にあったことを説明する。次いで本研究の動機・目的を論じ、中国・日本における先行研究について分析した上で、本研究の意義、研究の方法について述べる。</p> <p>第二章では、第一節で子規漢詩と陶淵明との関わりを考察する。子規漢詩に用いられた陶淵明と関連する詩語を丁寧に分析し、従来の隠逸的な淵明像とは異なる子規独自の淵明像を浮き彫りにさせ、その人生観が子規にも大きな影響を及ぼしていることを論証する。第二節では、子規漢詩と杜甫との関連を分析する。子規はその詩作において杜甫の詩語と詩境を多用する。特に中国での従軍記者としての体験によって杜甫詩への理解がより深まっていったことが分かった。第三節では、子規漢詩と李白との関係を考察する。子規は李白詩に見られる独創的な発想や表現に憧れる一方で、それを自らの詩作に実践することの困難さを実感する。そのため子規は、写実において斬新さを生み出す道を模索したことを明らかにしている。第四節では子規漢詩における『莊子』の受容の実態を丹念に分析している。第五節は子規の「絶命詩」に対する考察である。「馬鹿野郎糞野郎」と詠われる特異なこの詩は、子規の愛読書であった『水滸伝』の魯智深と深く関連していることを論証している。想像を絶する病苦との戦いの中で作られた「絶命詩」には、死を平然と迎えようとする子規の覚悟とわずかに残された生を平静に生きていこうとする悟りにも似た思いが込められていることを論述している。以上の五つの節の考察を通して子規は自らの漢詩作品に中国古典の言葉や表現を巧みに取り込むのみならず、自らの人生観にも中国古典が大きな影響を及ぼしていることを明らかにしている。</p> <p>第三章では、第一節で子規漢詩に見られる女性観について考察する。子規の閨怨詩では、いわば想像上の女性が多く詠われている。そこには子規自身の体験、すなわち少年期に家を離れ寂しい生活を送った自身の立場と閨怨詩に詠われる女性とを重ね合わせている。また、現実の女性として妹や母を詠う詩には、子規の愛情を読み取ることができることを述べている。第二節では、子規漢詩の平仄に着目し、いわゆる定型詩について詳細に分析した。その結果、子規の漢詩においては、ほぼ規則通りの平</p>			

仄となっていることが分かったが、同時代の他の文人との比較も必要であろう。第三節では、いわゆる日本漢詩に多く見られる和習の問題について分析している。日本の地名・人名、風習・説話など日本的な詩語が子規の漢詩には多用されているが、それは欠点ではなく、却って日本漢詩の独自性を主張するものとなっていることを論述する。第四節では、子規の題画詩について考察する。題画詩の分析によって子規の価値観や絵画論について述べている。第五節では、子規の詠物詩を取り上げ、その写実的特徴などについて述べている。このように第三章では、子規漢詩の特徴について様々な視点から考察している。

第四章では、各章の考察によって得られた内容をまとめた上で、研究の過程で明らかになった問題点・課題について述べる。

以上、述べたように、本論文は六百首余りの正岡子規の漢詩を丹念に読解し、様々な視点から子規漢詩の特徴を明らかにしたもので、高く評価できる。今後、更に同時代における日本漢詩での子規漢詩の位置づけ、子規文学における漢詩の意義など、発展的研究が期待される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1, 500 字以内とする。